



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本ローマ・カトリック教会における邦訳祈禱文 : 「主の祈り」に関する考察 : 翻訳の歩みとその意義について
Author(s)	牧野, 玲子
Citation	基督教学, 33, 25-28
Issue Date	1998-07-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46591
Type	journal article
File Information	33_25-28.pdf



日本ローマ・カトリック

教会における邦訳祈禱文

『主の祈り』に関する考察

—— 翻訳の歩みと

その意義について ——

牧野 玲子

はじめに

日本カトリック教会はその誕生（一五四九年八月十五日 Francisco de Xavier 等の鹿児島到着）以来、数多くの邦語（訳）教会関係文書を著してきた。今日我々は、研究者諸氏の地道な努力、マイクロ・フィルム等による古書の保存と優れた復刻技術のお陰で、貴重な諸資料を用いて邦訳教会用語の変遷を検証することができる。十六世紀半ばに渡来したキリスト教は、それまでの日本に

は無縁の宗教であり、宣教師達の母国語や、¹⁾四世紀以降カトリック教会の公用語になったラテン語もまた同様であった。然し日本の布教を託されたイエズス会士達は来日から五十年を経ないうちに、宣教活動に欠かせない書を次々と翻訳し刊行した。また、彼らとその後継者達（パリ外国宣教会）がキリスト教の機微を伝える為に考え出した訳語表記法には難解な日本語（文字）の特徴を巧みに利用した彼らの知恵も伺える。今回は『主の祈り』（邦訳）²⁾によって教会用語翻訳の歩みを紹介しよう。

日本ローマ・カトリック教会における

祈禱文『主の祈り』翻訳の歩み

1 資料について：研究発表の際に示した日本ローマ・カトリック教会関係22書は5類型5版4司教区に区分できる。³⁾

2 邦訳教会用語の表記法（日本カトリック教会の場合）

……宣教師達は教会用語を翻訳または日本語に置き換える際に凡そ四通りの方法を採用した。《1》既成和語語彙（古事記、日本書紀等からの神道用語）を当てる

(Deus→かみ)《2》漢字・漢語の借用 (Deus→天主)
《3》儒家思想、仏教等キリスト教以外の宗教・哲学用語の借用 (Deus→天帝・上帝・大日)《4》ラテン語、ポルトガル語の教会用語並びにこれらが転訛した新語を平仮名・片仮名で表記する原語主義 (Deus→デウス)

3 日本カトリック教会訳公式祈禱文『主の祈り』……
当該資料は訳語及び表記法によって①キリシタン伝統用語系統②漢語系統③混合系統に分類できる。多くの南緯資料のように、前述《1》《4》併用法を採用のものもある。因に北緯では明治十五年版を最後に消滅する。

③

I、類型による区分：①要理書②漢字本要理書③祈禱書

④ミサ解説書⑤新約聖書。

II、版による区分：①イエズス会が十六～十七世紀に日本で印刷出版したキリシタン版②パリ外国宣教会 P. S.B.Girard/P. Mounicou 訳一八六五年版要理書③パリ外国宣教会が十九世紀後半に日本で印刷出版したキ

リシタン版のうち、一八七六(明治九)年以前に B.T. Petitjean 司教から認可されたもの④一八七六年以降のブレイジャン版⑤ド・ロ師による印刷物⑥その他
主として P. Osout 司教認可の文書。

III、出版認可司教区による区分：①日本代牧区一八四六年五月一日設立(一八七六年五月二十二日)六月三日説もある)南北に分割される②南緯代牧区③初代司教伯爾納鐸 (B. Petitjean M.E.P.) ④北緯代牧区⑤初代司教伯多祿 (P. Osout M.E.P.) ⑥全教区一八八八年南緯から近畿・中国・四国地方を分離→中部代牧区設立・一八九一年四月十七日北緯を二分→函館司教区設立・同年六月十五日教階制 (Ecclesiastical Hierarchy) 実施→各代牧区の司教区昇格により四教区(東京・函館・大阪・長崎)成立

資料編

日本カトリック教会訳公式『主の祈り』は、既述の通り三系統に分類できる。小論では紙数の関係上③系統資料「費畧降生壱千八百七十七年再板『聖教初學要理』日

本司教伯多祿准」のみを扱う。本書は㊦振り仮名に㊧キリシタン用語を添える表記法を採る。ここでは主要語に絞って㊨㊩を記す。この書は日本代牧区分割の翌年に北緯初代司教 P. Osout M.E.P. が認可した「プティジャン版の再板本」である。本文三十五丁表と付録一丁表（和綴じ）に邦訳『主の祈り』が載っているが、何故か両者は不統一である。ここでは本文記載の公式邦訳祈禱文『主の祈り』をみる。

大主經 ㊪たいしゅけう ㊫おんあるじのおらしよ

天(てん)に在(まし)ま す我等(われら)の御父(おんおや)

御名(みな)ハ尊(たつ)と ばれ給(たま)へ

御國(みくに)を來(きた)らせ給(たま)へ

天(てん)に於(おゐ)て思召儘(おぼしめすまゝ)なるが如(ごと)く地(ち)に於(おゐ)ても在(あら)せ給(たま)へ

日々(にちにち)の御養(おんやしなひ)を今日(こんにち)我(われら)に與(あた)へ賜(たま)へ

我等(われら)が人(ひと)に赦(ゆる)すが如(ごと)く我(われら)の罪(つみ)を赦(ゆる)し給(たま)へ

我等(われら)を誘惑(㊪いうかん㊫てんと)に放(はな)ち給

(たま)ふこと勿(なか)れ

我等(われら)を凶惡(きやうあく)に遁(のが)し給(たま)

へ亞孟(㊬あめん)

㊭1…付録一丁表「我等(われら)の凶惡(きやうあく)を

遁(のが)」とある。

㊭2…本資料と初期プティジャン版二書との比較

(1) 大主經(㊪たいしゅけう ㊫おんあるじのおらしよ) ㊬(慶

応四) 御主(㊫おんあるじ)の經(㊫おらしよ) (明治4)

御主(㊫おんあるじ)の經(㊫おらしよ)

(2) 御父(おんおや) ㊬(慶応四) おんおやさま (明治

4) 御親(㊫おんおや)

(3) 罪(つみ) ㊬(慶応四) とが (明治4) 科(㊫とが)

(4) 誘惑(㊪いうかん㊫てんと) ㊬(慶応四) てんと (明治

4) 誘惑(㊫てんと)

(5) 亞孟(㊬あめん) ㊬(慶応四) あめん (明治4) あめ

ん

※本書は大主經解説文箇所にも「天主㊪てんしゅ㊫でうす」とあり①と②の混合系統資料である。大主經、誘惑は代表的な漢字・漢語で慶應元年版の原典をはじめ早い時期

に数種のシナ教理書が日本に入っていた事、漢籍が知識人に好まれた事等によりその影響は大きく教会文書も次第に漢字・漢語重視へ傾斜していった。

おわりに

日本カトリック教会の邦訳祈禱文『主の祈り』の翻訳の歩みを一を概観する為に今回提示した資料は主に要理書である。カトリック教会が人々を正統信仰に導く目的で編纂した当該書は、信徒になるための必修の書、宗教教育用教科書として重視されてきた。日本の教会は一五九一年十月までに活版印刷による本格的出版物・天正版国字本『ドチリナ・キリシタン』(ポルトガル語 *Doutrina Christã*、ラテン語 *Doctrina Christiana*)を刊行し、それ以来時宜をはかり状況を判断しながら『公教要理』の改訂に努力してきた。それ故に要理書は『主の祈り』をはじめ主要祈禱文の研究に不可欠な資料といえる。公式認可済の祈禱書は祈り文の検証が容易で資料としても優れているが、編年体による資料紹介には不足である。邦訳新約聖書の場合は更に深刻で、カトリック教会には聖

書の自由解釈・翻訳公認の伝統がない為か、司教認可邦訳聖書関係資料は極めて少ない。だが提示資料(貴重本)高橋五郎訳「耶蘇基利斯督降生一千八百九十五年／聖福音書上／東京大司教伯多祿瑪利亞出版認可」は、教会の公式邦訳祈禱文『主の祈り』の翻訳史上画期的な資料になった事を付言しておこう。キリシタン発見を機に復活した教会最初の要理書出版(一八六五年)から三十年後、日本カトリック教会は四教区(東京・函館・大阪・長崎)指定書『天主公教要理』出版を決定(一八九五年)し、終に全国共通の日本語公式祈禱文『主禱文』を訳出した。あれから百年、日本カトリック教会の司教総会は一八九四年十二月「用語検討特別委員会」設置を承認し典礼用語の見直しを開始した。「刷新と適応」を目指した第二ヴァティカン公会議(一九六二年十月～一九六五年十二月)から約三十年、驚異的变化を遂げた教会は、邦語(規範版)『ミサ典礼書』改訂作業に着手した。これに伴って現在の公式祈禱文『主の祈り』(文語体)も紀元二千年を目処に(全キリスト者共通テキストを目指して)改訳の予定、ときく。